

聖書：創世記 34：1～31

説教題：困ったことをして

日時：2024年4月7日（朝拝）

ヤコブは20年間にも及ぶパダン・アラムでの生活を終えて、ついに約束の地カナンへと帰って来ました。彼には兄エサウとの和解という大きな課題がありましたが、神の導きにより、まさかと思える素晴らしい和解が導かれました。その後、ヤコブはどうしたのでしょうか。私たちは当然ベテルに向かうものと思いました。彼はこの地を出て行く時、ベテルで主にお会いし、誓願を立てましたし、主もパダン・アラムにいたヤコブに現れて31章13節でこう言われました。「わたしは、あのベテルの神だ。あなたはそこで、石の柱に油注ぎをし、わたしに誓願を立てた。さあ立って、この土地を出て、あなたの生まれた国に帰りなさい。」ところがヤコブは、すぐにはそこに行きませんでした。33章17節に記された通り、彼はスコテへと移動し、そこで自分のために家を建てました。家を建てたということは、しばらくの期間、そこで生活したことを意味します。その後、彼はシェケムへと移動しました。シェケムはベテルと目と鼻の先の距離にある場所なのに、彼はベテルへ行かず、シェケムにとどまりました。そしてここで彼は大変な事件に巻き込まれます。もっと早くベテルに向かっていたらと悔やまれるような出来事が起こったのです。

その事件とはヤコブの娘ディナがこの町の男に犯されるという事件でした。この地に戻って来た時、ディナは7歳か、それ以下であったと考えられます。しかし彼女はこの時、すでにティーンエイジャーになっていたと思われます。ですからヤコブはこの地に戻ってから、スコテとシェケムを合わせて10年前後住んでいたことになりません。これだけの期間、ヤコブはベテルへ行かなかったのです。その間にこの事件が生じました。

まずこの出来事についてディナにも問題があったと言うべきかと思います。33章18節にあった通り、ヤコブはシェケムの町の手前に宿営していました。しかしディナは町の中へ入って行きました。しばらくここに住む間に町の中のことに興味を持ったのでしょうか。そこはどんな町なのか、どんな人たちがいるのか、好奇心に突き動かされてフラフラと出て行った。彼女としては無邪気だったかもしれませんが。しかし年頃の娘が無防備で町の中へ入って行ったらどんなことになるか想像のつくところです。

この結果、その土地の族長であるヒビ人ハモルの子シェケムが彼女を見て、これを捕らえ、これと寝て辱しめるという事件が生まれました。彼は強制的にディナを辱めたのです。その後、彼はディナに心を奪われたと3節に続きます。辱しめて捨てたのではなく、「心を奪われ、この若い娘を愛し、彼女に優しく語りかけた」と。そして父ハモルに「この娘を私の妻にしてください」と言います。

このニュースがヤコブの家に届きます。彼はどうしたのでしょうか。5節に「ヤコブは黙っていた」とあります。自分の娘がひどい目にあつたのに、なぜ彼は何も言わなかったのか。啞然として言葉を発することもできなかったのか。それとも無関心だったのか。あるいは黙って怒りをため込んでいたのでしょうか。やがて息子たちが野から帰って来ます。彼らは7節に「心を痛め、激しく怒った」とあります。ヤコブと対照的です。そして聖書はこの彼らの反応を正しいとしているようです。7節後半に「シェケムがヤコブの娘と寝て、イスラエルの中で恥辱となることを行ったからである。このようなことは、してはならないことである」と説明されます。息子たちのこの反応は当然であると言っているようです。とすると先のヤコブの反応の方が適切ではないと暗に批判しているように思われます。参考になるのは、後にヤコブが愛する妻ラケルの子ヨセフが死んだと知らされた時の反応です。37章34節に「ヤコブは自分の衣を引き裂き、粗布を腰にまとい、何日も、その子のために嘆き悲しんだ」とあります。後にはこういう姿を示すヤコブなのに、なぜ今日の箇所では黙っていたのでしょうか。それは1節に記されていた通り、ディナはレアが生んだ娘だったからでしょうか。愛されない妻の子どもだったからでしょうか。だから冷淡だったのでしょうか。ヤコブのこの時の霊的状态も関係していたと思われませんが、ディナがレアの子だったことも、この時のヤコブの反応と大いに関係があったように思われます。

さてシェケムの父ハモルはヤコブと話し合うためにやって来ました。これを機会に互いに姻戚関係を結びましょう、あなたがたは自由に行き来してください、また土地を得てくださいと言います。息子シェケムも「皆さんのご好意を得られるのなら、おっしゃる物を何でも差し上げます。どんなに高い花嫁料や贈り物であっても、云々」と。辱しめた後、捨てるよりはまだましです。しかし明らかに欠落しているのは何でしょうか。それは謝罪です。自分が一方的に行った悪についての悔い改めがありません。責任を取って解決しようとするのは良いですが、それに先立つべきお詫びがありません。

これに対して 13 節以降でヤコブの息子たちが答えます。ヤコブが黙っていて何もしないからでしょうか。彼らの思いが改めて 13 節に記されています。それは「シェケムが自分たちの妹ディナを汚した」ということです。そこで彼らはシェケムとその父ハモルをだまそうとしたとあります。どういう意味であるかは、この後、明らかになります。彼らは相手に割礼を求めました。無割礼の者に私たちの妹をやることはできない。だからあなたがたの男たちみなが割礼を受けることを求める。それならあなたがたの申し出に同意し、一つの民となりましょう。そうでないなら私たちは娘を連れて去ります、と言います。驚くべきことにハモルとシェケムはこれを受け入れます。19 節に「この若者は、ためらわずにそれを実行した。彼はヤコブの娘を愛していたからである」とあります。また彼はこの町の族長の子であり、次世代のリーダーとなる人でした。その彼が町に帰って父とともに人々を説得します。あの人たちは私たちに友好的であると。だから彼らをこの地に住ませ、自由に行き来させよう。私たちは彼らの娘たちを妻に迎え、私たちの娘たちを彼らに嫁がせて、一つの民となろう。そうすれば彼らの財産は我々のものになると言います。真の理由は表に出さず、都合のいいことだけを言っているようです。これを聞いて、その町の男たちはみな割礼を受けました。

そうして三日目になって彼らの傷が痛んでいる時、ヤコブの二人の息子が剣を取って難なくその町を襲ったと 25 節に続きます。この二人の息子とはディナの兄、シメオンとレビでした。彼らもレアの子であり、ディナは直接的な妹でした。ですから赦せない。彼らは割礼を受けて力を発揮できないすべての男たちを容赦なく殺しました。ハモルとその子シェケムも剣の刃で殺し、その家からディナを連れ出しました。さらに彼らはその町の家畜、財産、幼子、妻たちを略奪しました。

これを知ったヤコブは焦燥感に駆られながらシメオンとレビに言います。30 節：「それで、ヤコブはシメオンとレビに言った。『あなたがたは私に困ったことをして、私をこの地の住民カナン人とペリジ人に憎まれるようにしてしまった。私は数では劣っている。彼らが一緒に集まって私を攻め、私を打つなら、私も家の者も根絶やしにされてしまうだろう。』」ここで一番多く出て来る目立つ言葉は何でしょうか。それは「私」です。私、私、私、私、・・・とヤコブは言います。彼が一番気にかけているのは私の安全、私の評価、私の将来。もっと娘ディナが辱められたことに兄たちのよ

うにショックを覚え、問題にすべきだったのではないのでしょうか。あるいは息子たちが行った明らかに行き過ぎの罪を問題にして問うべきだったのではないのでしょうか。ところが彼は結果ばかり気にしています。特にそれが自分に及ぼす影響ばかりを気にかけています。何かずれていないかと誰もが感じずにいられないのではないのでしょうか。つまりヤコブはこの時、そういう霊的状态にあったということです。彼は周りの住民から報復されることばかりを恐れています。先の神に信頼して行列の先頭に立つヤコブの信仰はどこへ行ってしまったのでしょうか。家長にふさわしいリーダーシップを彼は全く発揮していません。これを聞いてシメオンとレビは最後 31 節でこう言います。「私たちの妹が遊女のように扱われてもよいのですか。」 彼らは「私たちの妹が」と言います。「あなたの娘が」とヤコブに訴えても良いところですが、彼らにとっては「自分たちの妹」です。「私たちの妹」です。この妹が遊女のように扱われて良いのですか！と彼らは叫びます。この息子たちの言葉が響く中で 34 章は閉じることとなります。

以上の箇所から私たちは何を言うことができるのでしょうか。まずは最初の方で申し上げた通り、この 34 章の事件はヤコブの主に対する服従が不徹底であったこと、不十分であったことが招いた出来事と見るができると思います。神との真夜中の格闘を経て兄エサウと和解するという素晴らしい経験をした彼は、後は生まれ変わった人として、別人のようになって、祝福の道ばかりを進むかと思いきや、それとは全く反対の出来事が今日の章に記されました。彼はここでも終始受身的でリーダーシップを発揮できていません。そのために息子たちが一層怒ったようにも思えます。父がもっと信仰に立って毅然とした態度を取っていれば、また違った結果になったのではないかと思います。しかしそうしなかったために恐ろしいことが生じてしまいました。もちろんヤコブだけが悪いわけではありません。ディナにも問題はありました。年頃の娘が好奇心に動かされてフラフラ出て行くのは賢明ではありませんでした。もちろんディナを力づくで辱しめたシェケムが悪いのです。あつてはならないことを彼はしました。またディナの兄たちも悪い。彼らが持った怒りは正しいと言えますが、だからと言って虐殺は正当化されません。ある罪の解決のために別の罪を犯して良いということにはなりません。彼らは一つの罪を責めながら、その町の男たちみなを殺すという明らかにバランスを欠いたとんでもないことをしました。こうしてみると皆が悪いと言わざるを得ません。「義人はいない。一人もいない」という聖書の言葉がここでも聞こえて来ます。

しかしそんな 34 章の慰めは、これでヤコブが捨てられたのではなかったということです。次の 35 章 1 節に目をやると、神はヤコブに「立って、ベテルに上りなさい」と言われます。神はなお彼らを導き、あるべき場所へと引き戻してくださいます。ある人はこれを見て次のように思うかもしれません。もしこのように神が声をかけてくださるなら、もっと早くにそうしてくださることはできなかったのか。そうすればこの 34 章の悲劇はスキップできたのではないかと。しかし神はそのようには導かれられないのです。神は私たちがその意志に反して無理やり導くことをなさいません。私たちが神に従わない場合、神はむしろその私たちの思いに私たちを引き渡し、言うならば行くがままにされるのです。この時のヤコブは兄エサウと和解し、素晴らしい体験をして、もう自分は大丈夫だと思って気が緩んでいたかもしれません。もう自分は何が来ても大丈夫だ、対処できると考えて、神に従う歩みにおいて後退し始めていたのかもしれません。神はそんな彼をある意味でそのまま行かせたのです。そして彼がその道を進んで失敗して、そのことを通して大切な学びをするようにと導いておられたのです。自分はそんなに立派な人間になったわけではないこと、主に頼らなくても生きて行ける人間になったわけではないこと、やはり主に頼って注意深く主の御言葉に従って歩むべきことを深く学ぶためです。そのためにこれほどに痛い道をあえて通らせたというのがこの 34 章の意義ではないでしょうか。ヘブル人への手紙 12 章 5～6 節：「わが子よ、主の訓練を軽んじてはならない。主に叱られて気落ちしてはならない。主はその愛する者を訓練し、受け入れるすべての子に、むちを加えられるのだから。」10～11 節：「肉の父はわずかの間、自分が良いと思うことにしたがって私たちに訓練しましたが、霊の父は私たちの益のために、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして訓練されるのです。すべての訓練は、そのときは喜ばしいものではなく、かえって苦しく思われるものですが、後になると、これによって鍛えられた人々に、義という平安の実を結ばせます。」

そのように読む時、今日の記事は私たちに希望のメッセージを語ってくれるものでもあると思います。それは私たちがたとえこのような状態になっても、なお希望があるということです。もし今日の箇所のようなことが自分の家庭に起こったとしたらどうでしょうか。もう人生は終わりでしょうか。すべては無に帰した、すべては失敗だったということになるのでしょうか。もちろんこのようなことが起こらない方が良いでしょうし、なるべくなら経験したくないと人間的には思います。しかしこの箇所は言っ

ています。このようなことが起こってもまだ希望はある。自分で受け入れにくいこと、心かき乱されるようなことが私たちの生活に起こるかもしれません。しかしそこでもすべての上に主権を持っているのは神です。神はそのことを通して私たちに何かを教えようとしてくださっています。大切なことを学んで救いの道を前進するように導いてくださっています。ですから私たちは自分に反省すべきところがあるなら真摯に反省し、悔い改めるべきことがあるなら悔い改めて、神の御言葉に耳を傾け、憐み深い御手にすがって行く者でたちでありたいのです。どんなに大変な苦境を通らされても、そのことを通して一層聖めの歩みを導き、訓練してくださる愛の神を見上げて、御前で真の成長を遂げる者とさせていただき、神が用意くださった祝福へと入る神の民の歩みを導いていただきたいと願うのです。